



# 伊那ロータリークラブ



事務所 伊那市西町5016-2 Tel(72)0077 例会日 毎週木曜日 例会場 くぬぎの杜 Tel(78)1121  
 会長 藤澤洋二 幹事 小松献臣 会報委員長 城取健太 第2907回例会 2020.8.20 No.1567



ロータリーは機会の扉を開く

2020-21 年度 RI テーマ

Rotary Opens Opportunities

**ソング** 我等の生業

**ビジター・ゲスト紹介**

米山奨学生

サンギートさん



**会長談話** 藤澤洋二会長

ニコニコ BOX についてお話しします。

ニコニコ BOX は、ロータリーの世界的な慣例ではありません。日本にはありませんが、世界中どこの国のロータリークラブにあるというものではないそうです。

日本でニコニコ BOX が行われるようになったのは、1935年（昭和10年）でした。1923年（大正12年）に関東大震災が起こると、国際ロータリーははじめアメリカ、イギリス、カナダ、など各国のロータリークラブから 89,000 円もの義援金（現在の貨幣価値で 3 億円位）や救援物資が送られてきました。この義捐金によって東京 RC は大きないろいろな社会奉仕活動を行いました。そのひとつが東京市の孤児院の敷地内に被災孤児のためにロータリーの家（ロータリーホーム）を新築寄贈することでした。

東京ロータリークラブは、ここの孤児たちを遊園地に連れていくための資金集めのために、クラブの会員達は金持ちであるがクラブには金がなかったため、ユーモアのある関幸重という会員が、「今月、あなたは誕生日ですね」「お嬢さんが結婚されましたね」などと言いながら、箱を持って例会場をまわったところ、会員達はニコニコしながら、協力してくれたということです。さすがは東京ロータリークラブで、当時の大学卒の初任給の 10 倍くらいの 600 円、現在の 200 万円位が集まり、孤児たちを遊園地に連れていくことができました。

それから何かあるごとに、東京ロータリークラブではその箱が使われるようになり、きちんとした箱が必要だということで、皆がニコニコしてお金を出してくれるからということから、三越百貨店に注文してえび

す様の顔を彫った箱を作りました。これがニコニコ BOX の始まりです。

ちなみにラッキー賞は、当クラブのオリジナルなニコニコ BOX のやり方です。ラッキー賞が例会の毎回毎回あっては大変ですが、月始めに一回くらいですのので良いのかなと思います。ラッキー賞には年間 MVP がありまして、一年間で数多くラッキー賞に当たった本当にラッキーな会員に送られます。今年 7 月に発表された昨年度のラッキー賞は、なんと小松献臣幹事と唐木拓 SAA と私藤澤でした。今年一年間がんばりなさいという天の声かなと思いました。頑張ります。どうぞよろしくお願い致します。

**入会式**

㈱アースプロット 代表取締役 三澤 聡 様

（紹介者 本田敏和会員）

昭和 48 年 4 月 10 日生まれ。辰野町在住で奥様と二人暮らし。中央大学経済学部産業経済学科ご卒業。趣味はゴルフとビリヤード。



㈱アースプロット 三澤土地家屋調査士事務所代表です。常に心掛けている事は、人として企業として正しい行動。常にスピーディに素早く対応する。どんなご要望にも誠実に

対応する。この事を心掛けています。伊那青年会議所や伊那商工会議所青年部でご一緒させて頂いたご縁で入



会させていただきます事になりました。

**幹事報告** 別紙をご覧ください。

**委員会報告** 創立 60 周年記念誌部会

大石ひとみ部会長



「60年のあゆみ」が出来上がりました。ご協力ありがとうございました。

**出席報告** 会員数55名 内出席免除16名

長欠0名 出席者38名 事前メーキャップ3名  
出席率82.00%

### ニコニコボックス

藤澤洋二・小松献臣 三澤聡様入会おめでとうございます。歓迎致します。

本田敏和 三澤さんご入会おめでとうございます。

三澤 聡 宜しく願い致します。

大石ひとみ 60周年記念誌が出来上がりました。

皆様ご協力ありがとうございました。

中山一郎 60周年記念誌の印刷を担当させて頂きました。

宮下金俊 本日の60周年記念誌発刊をもって60周年記念事業が終了となります。会員皆様の多大な協力に感謝申し上げ、創立60周年実行委員会の解散を宣言します。

塚越 寛 出席が悪いのを詫げる気持ちで少し。

宮下 裕 最高齢にて免許取得。大型特殊牽引。

八木択真 本日卓話させて頂きます。宜しくお願い致します。

### 会員卓話 八木択真会員

#### 演題－「私の履歴書」－



貴重な機会をありがとうございます。株式会社はしばの八木択真と申します。伊那市中心部で飲食店4店舗を運営し、地域の飲食店の皆さんと協力してコロナ禍を乗り越えるための「伊那谷テイクアウトマーケット」という店も運営しています。今はコロナ直撃の業界で、本当に大変です。4月は前年比9割減。7月になってようやく客足が戻ってきたと思ったら、第二波でまた逆戻りです。でも、リーマンやバブル崩壊やオイルショックを乗り越えて来られた大先輩の皆さまの前に立たせてもらおうと、まだまだ頑張りが足りないな、と思えます。

私は大阪出身で、大学進学で伊那に来ました。信大農学部を選んだ理由の「環境問題に取り組みたい」という真面目な思いはほどなく忘れて、まったく学校に行かなくなり、伊那の街で酒を飲んで、車を改造して峠を走り、そのお金を稼ぐためにバイトばかりしていました。バイト先は藤澤会長の扇屋石油で、大変お世話になりました。当時小松幹事や中央鋳金の宮下会長もよく来てくださっていて、ご縁を感じます。遊んでばかりでど

うしようもない学生時代でしたが、そのおかげで地元の仲間がたくさんできて、伊那が故郷になっていきました。

6年かかって卒業して、産経新聞に入社。大阪社会部を中心に、事件担当としてやりがいのある日々でした。伊那に戻るようになったきっかけは、東日本大震災の取材。大阪本社からの応援取材班の第一陣として、地震発生翌朝には現地入りし、壮絶な現場を歩きました。

まだ自衛隊も入れていないような現場も多く、あちこちにご遺体があるのに何もできない。かけてあげる毛布もない。避難所では「生きてたんだね」と抱き合っている人もいれば、隣の安置所ではご遺体にすがりついて泣いている人がいる。歓喜と慟哭とがごちゃ混ぜになった現場に居続けて、自分自身も心が壊れました。でも、一カ月、三カ月、半年、一年と、節目節目に被災地に足を運ぶうちに、立ち上がる人が春の芽吹きのようにどんどん増えてくるんです。津波で何もなくなった故郷で、「それでもここで生きていくんだ」という人たちが。それを見て、自分自身にとっての故郷はどこなのか、と考えさせられました。「伊那に帰ろう」と思ったんです。そして伊那で住む家を探し始めたとき、入舟の古い元歯医者さんの建物に出会い、ひと目惚れして購入。退職して居酒屋に改装し、今に続いています。

それから民間の団体による地域活性の活動に取り組み、議員や市長選も経験させてもらいました。大変な時期もたくさんありましたが、様々な経験を通して感じるのは、伊那がとてもいい土地であり、大きな可能性があるということです。日本に3つしかない全国の憧れのアルプスの2つに囲まれている環境はもちろん、なにより人が優しい。全国のいろんな地方都市を見てきましたが、これほど人に寛容な地方都市はなかなかないです。移住者と地元の人が共に頑張っておられるケースがとても多い。本当にいい街だと思います。

伊那は可能性もあります。私はこれまでにいくつかの古い空き店舗を改装して明かりを灯してきました。伊那市駅近くの廃墟になっていた小さな商店街をグルメ横丁として再生し、賑やかな場所になりました。そこは地元の人にとっては、長いこと危険でおっかない場所だったのですが、視線を変えて活用すれば、人が集まる素敵な場所になる。そのような、地元の人が気付いていない財産が、伊那にはまだまだたくさんあると感じています。

今、事業は大変な時期ですが、あきらめず、前へ前へと進む決意です。歴戦の先輩方のお知恵を借りながら、必ず乗り切ります。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。